
子守唄

ポピー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

子守唄

【Nコード】

N3095Y

【作者名】

ポピー

【あらすじ】

サトシとヒカリ、タケシがカズナリ、コトネと共に旅をしていて野宿をすることになった一行。

夜になってサトシたちが話をしているとヒカリのヒノアラシが急に泣き出してしまった。

サトシはヒノアラシのために子守唄を唄う。

（前書き）

短編をつくってみました。

サトシとヒカリはデュエットしてますから、子守唄も歌ってみたらいいんじゃないかしら、という感じで作りました。

映画の話も使ってみました。

サトシとヒカリ、タケシそして今、旅に同行しているカズナリとコトネは旅の途中、野宿をすることになった。

夕飯を食べ、思い思いに焚き火の回りで話をしていた。ピカチュウやポッチャマ、ヒノアラシやマリルは既に眠りについていて、街灯一つない野の中で焚き火の火と星と月の光だけが輝いていた。

寝ているヒノアラシを見たサトシがポケモンの卵や卵が孵る瞬間の感動の話をし、皆はその話に聞き入っていた。

そんな話をしているなかで、突然ヒカリの隣で寝ていたヒノアラシが泣き出した。

「あー、どうしたのヒノアラシ。あたしはここよ。だから、大丈夫大丈夫」

ヒカリは必死にヒノアラシをあやすがなかなか泣き止まなかった。

「怖い夢でもみたんじゃないかな」

「そうね、きつとそうよ。ほらほらヒノアラシ。あたしはここよ。ここにいるわ。あなたの側にいるから大丈夫よ。ねっ」

ヒカリはヒノアラシの眼をじっと見て優しく語った。すると泣いていたヒノアラシが泣き止んだ。

「ヒノアラシ・・・大丈夫・・・」

ヒカリは泣き止んだヒノアラシを優しく抱きしめていた。

「どうやら泣き止んだようね」

「すごいです。ヒカリさん」

コトネはホッと胸を撫で下ろし、カズナリは泣き止ませたヒカリに称賛を送った。カズナリの言葉を聞いたヒカリは少し照れた。

「タケシが前にやってた事を真似しただけよ」

「ああ、ピンプクるときか。そういえばウソハチのときもそんなことしてたよな」

サトシの言葉を聞いたコトネは感心したように、

「へーえ、タケシってなんだか本当のお母さんみたいね。男より女の方が良かったんじゃない」

コトネに茶化されたタケシは少し肩を落としていた。

「あら気にすることないわよ、タケシ。最近子育てする男だっ増えてるんだから」

「ありがとうヒカリ。でもフォローにはなってないよ・・・」

「あら、そう」

ヒカリはクスクスと笑った。

そんなヒカリの腕の中でヒノアラシは気持ち良さそうにしていた。

「大丈夫よ。ヒノアラシ。こうしててあげるから、眠たくなったら寝ても大丈夫よ」

ヒノアラシは小さく一鳴きした。

そこでサトシは何かを思い付いたようにヒカリの隣に座った。

「どうしたのサトシ・・・」

サトシはヒカリの方へ近付いてヒカリの腕の中にいるヒノアラシに笑顔をみせると、静かに歌を歌いだした。

歌詞はなく、ルで歌っているが、彼は透き通るような綺麗な歌声で回りの人達は聞き入っていた。

サトシが一旦区切るとタケシは呟くように、

「その歌、ハルカが歌ってた」

タケシの言葉にサトシはへへッと頭を掻いた。

「ハルカが・・・」

「前にハルカとタケシ、ハルカの弟でマサトってやつと旅してたときに、マサトがジラーチってポケモンと友達になって、夜マサトとジラーチが眠ったときに歌ってた歌なんだよ・・・なんだか頭から離れなくってさ」

「へえ、いい歌よ。サトシ。サトシも歌うまかったし」

ヒカリが誉めるとサトシは顔を赤らめ照れた。

「へへッ、サンキュー」

「ねえ、あたしも歌っていい」

ヒカリの言葉にサトシは笑顔で返した。

「勿論だよ。一緒に歌おうぜ」

そうして二人は静かに優しく歌いだした。二人の子守唄はうまくハモリ、いつの間にかヒノアラシはヒカリの腕の中で寝息を立てて気持ち良さそうに眠っていた。

その姿を見た二人はお互いを見つめあってフツツと笑った。

そんな二人をタケシは優しく見守っていた。

「なんだか夫婦みたいね」

「えっ・・・」

「あの二人よ。なんだかそんな感じしない」

コトネの言葉を聞いたカズナリはサトシとヒカリを見比べてクスツと笑って、

「そうだね。確かに・・・」

二人ともまだ十歳だからそんな関係じゃないだろうし、本人たちもまだ何も気にしてないのだろう。
でも・・・もしかしたらいつか二人はあんな風に子どもに歌ってあげるかもしれない。
そんな風を感じたコトネとカズナリであった。

（後書き）

そんな感じで短編でした。

勢いに乗って作ったので色々おかしいかも・・・

子守唄なのに子守唄の描写が薄い。

それにタケシの存在が薄い気がする。

こんな感じでしたが感想よろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3095y/>

子守唄

2011年11月15日18時15分発行